

今号の理系さん



田中 俊哉 さん

東京都立立川高等学校
創造理数科
(高校3年生)

生き物が好きで魚類、特に国内外来種の在来種への影響を研究している田中俊哉さん。仲間とともにフィールドワークに出ては年間1万匹以上の魚を捕獲し、多数の学会で発表する彼はどのようなモチベーションで研究を進めているのでしょうか。

◆どうして魚に興味を持ったのですか？

物心ついた頃から生き物が好きでした。最初はトンボに夢中で、とにかくたくさん捕まえたかったんです。でも観察すると、石に止まって縄張りをつくるウチワヤンマのような種類もいれば、オオヤマトンボのようにずっと飛び回る種類もいる。「種類によって全然違う！なんでだろう？」とその違いにすごく興味を持ちました。それが研究の原点かもしれません。その後、トンボのヤゴを捕りに川へ行くうちに、網に入る魚たちにも魅力を感じるようになったんです。そして捕獲を続ける中で年によって捕れる魚が変わってきていることに気づき、魚と環境の関心に興味が移っていきました。

◆どんなことを考えながら研究を進めていますか？

小学校高学年から見てきた川の変化、特に国内外来種のカワムツが増えて在来種が減っていることに気づいたときに抱いた「本来の生態系はどうなったんだろう？」という疑問を解き明かしたくて、研究を進めています。これは実験室の中にももっていても解決するものではなくて、フィールドに出ないと絶対にわからないことなので、とにかく現場に行くことを大切に

しています。調査方法も試行錯誤する中で、水中カメラや釣りから始まり、今はタモ網で捕獲しています。加えて、研究を深めるためには他者からの視点も重要です。学会に参加した際には、研究対象の国内外来種が本来生息している西日本の川は急で流速が速いのに対し、調査している関東地方の川はなだらかで流速が大きく異なることを専門の研究者から助言してもらいました。これは自分たちにとって盲点であり、元の生息地の環境という新たな視点を得ることができました。

◆これからどのようなことに挑戦しますか？

大学で研究を続けたいです。一回失われてしまったものは元に戻らないので、昔から維持されてきたものをいかに未来に残していくかという保全の研究に興味があります。中でも純淡水魚であるコイ科の魚は海を越えて移動できないため、地域ごとに独自の進化を遂げている点がおもしろいと思っています。すぐとなりの川でも種類が違うこともあって、だからこそ、地域の遺伝的な特徴を守ることが大切だと考えています。コイ科の生態を深く解明し、その保全に貢献していきたいです。

田中さんは

現場主義で魚と環境の関係を追究する研究者

とにかく現場にいきながら研究を進める田中さん。「わからないことが増えていくこと自体がおもしろい」という言葉が印象に残っています。これからも魚の保全を目指して果敢にチャレンジしていくのでしょうか。

(文・橋本 光平)